

「人のなすことには潮時というものがある」

佐々木 隆

シェイクスピアは詩人として、戯曲家としても有名であるが、様々な戯曲の中で気になる台詞が沢山ある。『ジュリアス・シーザー』（第四幕第三場）には次ぎのようなブルータスの台詞がある。

人のなすことにはすべて潮時というものがある、

うまくあげ潮に乗れば幸運の港に達しようが、

それに乗りそこなえば人生航路の行き着く先も不幸の浅瀬というわけだ、動きがとれぬことになる。(小田島雄志訳より)

人生を航海に喩える例は多々あるが、この場合には船に喩えるのではなく、潮の方に注目している。シエクスピアの作品には、*carpe diem*(この日をつかめ、この日を楽しめ)といった精神が表しているとよく言われる。ここにもそんな精神の一端を見ることが出来る。

『ロミオとジュリエット』や『ハムレット』でもよく感じることは、「運命と人間の意志」の関係である。「もしあの時…していたら」という考え方である。これはまさに、「運命」と「人間の意志決定」の関係について考えていることになる。シエクスピアの台詞には、不思議な力がある。台詞に込められた内容が、我々の日常生活でもすぐに当てはまり、まるで自分のために語られたものと思えるからだ。このブルータスの台詞に触れた時、人はどうした

ら「潮時」を感じる事ができるだろうか、と考えるてしまう。何をするにも確かに「潮時」というものがある。人はそれを「タイミング」と呼んでみたり、あるいは、「天からの声」、「風」と呼ぶかもしれない。この潮時を感じる事が一番重要であろう。自分の準備と周囲の様子をよく観察し、決断することになる。ここで迷っていると、行動できなくなる。

このままでいいのだろうか、いけないだろうか、それが問題だ。(『ハムレット』第三幕第一場、小田島雄志訳より)

これを通り越すと、というよりは、客観的に自分ととらえられるようになると、大きな視点から自分を見ることが出来る。潮の満ち引きはある程度決まった時期というものがある。つまり、よく注意さえしていれば、誰もが気が付くものなのである。しかし、自分は「くしたい」という気持ちが強くなればなるほど、冷静な観察や判断が出来なくなってくる。自

分の都合のよい方に判断してしまふことがよくある。

自然は人間にとってよい手本である。誰に指示されるともなく、また、誰に教えられるともなく、季節は巡つていく。異常気象になると、この自然の摂理に従つて季節外れの花が咲いてみたり、いつまでも暑い日が続き、植物はなかなか紅葉しなかつたりする。しかし、植物にとっては自然に合わせることに「潮時」なのである。誰かの都合に合わせて花が咲いたり、紅葉するわけではない。

しかし、人間は自分達で決めた約束ごとに縛られて、時期を逸しているのに、相変わらず計画通りに何でも進めようとするところがある。それも、「決まったから」という理由で。潮の流れには、満潮と干潮があることを忘れている。一気に進める決断とともに退く決断にも潮時がある。古来より戦さなどでも進むことより、退く決断の方が難しいと言う。carpe diem はだからこそ、今、この一瞬が大切だということなのだ。今、自分は何をすべきなのか、ど

うしたらよいのか、こんなことにも潮時がある。

『ジュリアス・シーザー』は、読めば読むほど、観れば観るほど、考えさせられる作品である。タイトルにもなっているジュリアス・シーザーは、作品の中であつという間にブルータスに殺されることになる。そのあと描かれるのは、ブルータスとアントニーが中心となる。特にブルータスの心情はいかばかりか。ブルータス自身は「潮時」がわかっていたのだろうか。いや、「潮時」がわかるにも潮時というものがある」ということなのだろうか。